

大人も子どもも市民として育つ環境をつくる

— レッジョエミリア市の実践からの示唆 —

猶原和子*

1. はじめに

筆者がレッジョ・エミリア市を訪問したのは、2014年夏、RIDEF（フレネ教師世界集会）に参加したのが最初である。

レッジョ・エミリア市といえば、幼児教育において世界的に有名で、日本でも2001年の「子どもたちの百の言葉」展以来、関心が高い。

しかし、訪問して一番驚いたのは、市民の参加者を受け入れる姿勢であった。10日間に渡るRIDEFの大会では、遠くに宿泊している若者や財政の厳しい国からの参加者に自転車が無料で貸し出され、街のいたるところで参加者誰もが、あたたかい歓迎を受けた。幼児学校には、ガラス窓に歓迎する絵が飾られており、参加者一人ひとりに市内の幼児が描いた絵がプレゼントされた。マラグッチセンターはすべて解放され、街全体が会場であるかのように、心地よく過ごすことができたのだ。

もちろん、フレネ教育とレッジョ・エミリアの教育との関係が深いことの影響はあるだろう。しかし、道行く普通の人々、市全体が教育を尊重し、大会を支える感じがして心を揺さぶられ、もっと、レッジョ・エミリアの教育と市民の関わりについて改めて学びたいと思った。これが研究の動機である。

2. 研究の目的と方法

子ども、そして大人の市民性を育てているの

は何か、市民性を育む環境についてフレネ教育と関連して明らかにするのが研究の目的である。

研究方法としては、文献と照らし合わせながら実際にレッジョ・エミリア市の保育施設や関係する幾つかの施設を視察し、関係者にインタビューを行ったり、街で行われる「レッジョ・ナラ」に参加したりしたことを基に考察する。

【レッジョ・エミリア市への調査】

期間：2016年5月12日～19日

調査場所 内容

- ・ Loris Maraguzzi International Center
見学とレクチャー（ペダゴジスタ）
- ・ 認可幼児学校 Centro Rosa Galeotti
見学とインタビュー（ペダゴジスタ）
- ・ 私立乳幼児施設 Giulla Maramotti
見学とインタビュー（保育者、ペダゴジスタ）
- ・ 教会系幼児学校 Elisa Lari
見学とインタビュー（校長）、
日本側からのワークショップ（5歳児）
- ・ コリアンドリーネ
町の設計の経過の説明と見学
インタビュー（不動産コンサルタント）
- ・ ボローニャのREMIDA
見学とワークショップ（アトリエリスタ）
- ・ Reggionarra
街中のあちこちで開かれるナラへの参加
- ・ Maramotti Museo
美術館見学
- ・ 保護者との交流会
幼児学校に通わせた保護者と、現地通訳者との交流

*江戸川大学こどもコミュニケーション学科 准教授

3. レッジョ・エミリア市の幼児教育の歴史

イタリア北東部、エミリア・ローマニャ州のボローニャを州都とするレッジョ・エミリアはパルマやモデナから20数キロのところにある。ポー平野に位置し、人口約16万人。現在はアジアやイスラム圏からの移民も多い。中小企業を中心に自治能力が高く、平均所得も国の中で高い。

歴史的にはイタリア・レジスタンス運動（パルチザン）が盛んだった地域であり、戦後、イタリアの3色旗が最初に掲げられたところでもある。街のあちこちには広場（ピアッツァ）が点在し、その一つには、レジスタンスの騎士をたたえる大きな記念像がある。

戦後、わずか5日めでヴィラ チェッラ（レッジョ郊外）に、UDI（イタリア婦人同盟）の支援で保育所建設を決議し、ドイツ軍の戦闘車とトラックをスクラップで売って資金にし、廃墟の建物のレンガを集めて資材にし、人海戦術で学校を設立。その後さらに45～47年にUDIが8箇所の施設を開設した。里見実は次のように述べている。

子育ての共同化は、大人の自己教育の過程でもあった。子どもの養育という共通の課題を通して、親たちの問題意識は社会に向かって大きく広がる。親たちを保育所の建設に向かわせた一つの原動力は、経済生活の逼迫であり、待たなしの飢えと貧困であったが、自分たちが身をもって体験したあの不条理を、子どもにまた繰り返させてはならないという思いだった。¹

1963年に市立幼児学校「ロビンソン幼児学校」を開設、1971年に市と任意団体の合併で乳幼児保育所「ジェノヴェッファ・チェルヴィ」(1943年パルチザン闘争でファシストに殺された7兄弟の母の名)を開設。イタリアの国内法で保育所の設立が定められるのがその後だと考えると画期的な出来事だといえよう。

1970年代からレッジョ・エミリアの教育に注

目してきた田辺敬子は、幼児とおとな（教師、親、市民、行政官）の共同による、異年齢間の人間の集団的取り組みによって、子どもと社会の総合的成長を目指す画期的な事業が進行したのだと述べている。²

レッジョ・エミリアの幼児教育施設にはアトリエリスタとペダゴジスタが配属され、広場とアトリエのある施設は大きな家のようなものである。教育の要はプロジェクトとドキュメンテーションが一体となって行なわれていることである。これは、子ども、保育者、保護者、市民をつなぐ絆であり、ともに学びあう組織も活発に活動している。

1996年、教育相はレッジョ・エミリア市と国立の幼児学校システムの教師の専門性を改善する権限と資金をレッジョの幼児教育システムに委託する合意を交わした。

さらに現在では、レッジョ・チルドレンのインターナショナル・ネットワークが広がるとともに、1996年に設立したREMIDA（クリエイティブリサイクルセンター）も幾つもの国で始まり、日本でも2018年に組織が生まれようとしている。

このように歴史を振り返ると、レッジョ・エミリア市は、教会や権威をかざす勢力に対抗し、市民が連帯し、戦後左翼の改革政治を推進してきた街である。それを支えてきたのは、UDI（イタリア婦人同盟）をはじめとするフェミニズム運動であり、60年代末から学生運動、70年代からの労働運動、そして今のレッジョ・エミリアの教育を推進したローリス・マラグッチ、及びMCE（イタリア教育協同組合運動）やCNNI（全国乳幼児学校団体）の人々である。これを踏まえて実際の姿をとらえることが必要であろう。

4. ローリス・マラグッチと彼に関わる人々

レッジョ・エミリアの幼児教育を語るのに欠かせないのが、ローリス・マラグッチである。彼の功績を称え、2006年に建設されたレッジョ・チルドレンの本部、研究や教育者育成の中心的施設は、ローリス・マラグッチセンターと命名

されている。

ローリス・マラグッチは1920年2月にコレッジョという村で生まれ、3歳の時、鉄道員である父親の仕事でレッジョ・エミリアに移り住む。小学校卒業後、教員養成学校に入学し、1939年からソローニョという農村の小学校へ赴任、その後ウルビーノ大学教育学部に入り、1946年に卒業。県内の小学校や中学校で勤務した後、UDIの学校やリナシタ寄宿学校に関わる。この寄宿学校は失業中の復員兵士やパルチザン兵士が学ぶ職業訓練施設だったが財政難のために閉鎖される。

1951年にローマで学校心理学講座を受講した後、マラグッチはレッジョ・エミリアの小児医療・心理・教育センターの所長に任命され、20年間務めた。彼は、子どもが心地よく安心してくつろげるように室内の配置に心を配るとともに、スタッフに地域や家族のもとに向いて親子と触れ合うことを奨励していた。

ここでの活動の中で、彼は児童画に着目し、それは幼児学校の「アトリエ」の原型にもなったとされている。また、子どもの教育は大人の教育と深く結びついていると感じ、「父母学校」も開催している。

この間、マラグッチはデユーイやピエジェ、ヴィゴツキー、フレネ、フレイレ、ブルーナーなどの理論から影響を受けて理論を構築してきた。ここでは、その中のフレネと関わる人々とのつながりを押さえておきたい。

イタリアにおけるフレネ教育は、MCE（協同教育運動）という団体で、その前身は、1951年に発足したCTS（学校印刷協同組合）であり、セレストン・フレネも1952年に訪れている。

彼らは印刷と学校間通信を中心に実験し自由作文、計画表や表現活動へと広げていった。やがてフランスのフレネ教育から、MCEは自分たちにあった独自の発展を続けていく。彼らは全日制学校の推進や障害児との統合教育、学校開放などを目指す。その中の中心的人物であるブルーノ・チアリやマリオ・ローディ、そして彼らと親密だったジャンニ・ロダリーから、マラグッチは大きな影響を受けている。

マリオ・ローディは『わたしたちの小さな世

界の問題』³で日本にも知られており、そこには、ブルーノ・チアリの教室との学校間通信が収録されている。彼はまた『ある女教師への手紙』でマラグッチら多くの教師に大きな影響を与えた、バルビアナの司祭ドン・ミラーニとも学校間通信をおこなっていた。

ブルーノ・チアリは、MCEきっての論客であり、ボローニャを活動拠点としていたが、1971年にはレッジョ・エミリアに招かれ「新しい幼児教育の経験」というテーマで講演している。900名以上の教師が参加したこの会で、既成のテキストを用いず、生活から出発し学校も生活の場としてとらえることやカリキュラムに縛られず毎朝の子ども一人ひとりの語りから授業を展開すること、生きた材料を用い子どもたちを活かしていくのだということなどが話された。彼は正しい幼児教育によって望むべき社会が達成できると信じていた。子どもの可能性を發揮できる舞台をつくりだすこと、市民も教育に参加するという考えはマラグッチの考えとも一致し、市の幼児教育は進んでいった。

マラグッチを含め、彼らはいずれもイタリア共産党員だが、イデオロギー的な体質に対しては異を唱えており、子どもたちが未来を開く鍵だと考えていたことも注目される。

1976年、カトリック教会を中心とする保守層から、レッジョ・エミリアの乳児保育所と幼児学校は国営放送で激しい非難を浴びる。マラグッチや市は公開討論を呼びかけ2年間に渡って議論が交わされた後、合意を結んでいる。イタリアの幼児教育は長年カトリックが支配してきたが、このように非難している宗教関係者も交えて市民や教師、保護者が議論する姿勢は、現在のレッジョ・エミリアの政治や教育にも大きく影響しているといえるだろう。

もう一人のジャンニ・ロダリーは、「チボリーの冒険」や「ファンタジーの文法」でおなじみの作家である。この「ファンタジーの文法」は、レッジョ・エミリアでの50名の教師たちと実験した言葉や物語を使った遊びのワークショップで生まれたものである。

ブレヒトなどの演劇も試してきたマラグッチとロダリーには共通するものが多かった。マラ

グッチはロダリーに深く魅了される。また、彼らは、言葉であそび、いろいろな意味を引き出すと同時に楽天主義者であった。彼らは、子どもが現実を思い描きその諸処の問題に迫るのは、想像力とファンタジーを通してである。その想像力を創造性に転嫁させるためには大人との連帯、そして子どもと大人が手を携え合うことが必要だという。

このような考え方は、フランスのセレストン・フレネの教育を彷彿させる。彼は学校間通信や協同組合活動を通して、子どもと子ども、子どもと教師、大人同士の連帯を強く求めている。

子どもを中心に置いた熱い思いをもとに、マラグッチの思想もさらに発展し、1980年レッジョエミリアに全国十字保育所・幼児学校グループを設立し、彼は1994年まで会長を務め、1991年には国際会議も発案している。

1991年、アメリカの『ニューズウィーク』誌が世界で最も優れた幼児学校10校の一つとして、レッジョ・エミリアの教育を取り上げたことで、彼らの取り組みは世界中に知れ渡った。

亡くなる前の年1993年に、マラグッチは「権利の憲章」という文章を書き、「子どもたちの権利」「教師たちの権利」「親の権利」について述べている。要点は以下のとおりである。⁵

【子どもたちの権利】

子どもたちには個人的、法的、市民的、社会的な権利の主体として、人やモノ・事柄との関わりを通して、積極的に自らのアイデンティティや自治活動などに参加することを認められる権利がある。自分と異なる他者やほかの文化との違いを知り、創造的知性、自由な学識と思慮深くて鋭敏な個性を形成することができる。その権利は、子どもたち誰に対しても与えられるべきである。

【教師たちの権利】

教職員は相互に、或いは教育学的調整役と学校陰影評議会の構成員との開かれた検討を通して、教育の内容や目的、実践を定義する概念の枠組みの考究と推考する権利がある。子どもたちの関係的世界や知識の獲得の要求と願望に応えるものとして子どもたちに掲示することによって、

知識の構成と再構成の社会的形態を深く革新し、強化できる。それは、教師自らが対話や思考と経験の比較を活発にし、評価の手段と専門的判断を豊かにするための条件である。

【親の権利】

公教育に委託される自分の子どもたちの成長、世話、教育の経験に積極的に参加するのは親の権利である。親たちの学校への参加は、より充実した相互的な知識とより効果的な教育の方法、内容、価値のより実りある研究をわかちあうコミュニケーションネットワークを可能にする。

また、親は異なった職業、文化的社会的背景を持ち、民族的にも異なるが、時間のゆとりのなさや親としての責任の困難、孤独や将来の不安と戦い、自分の問題、特に子どもたちの成長や教育について語ったり、議論したり、熟考したいという願いや必要性を感じている。

我々は自己充足的で前もって規定された教育学がいかに敵対的で誤っているか、反対に参加と研究の教育学がいかに友好的で実り多いものであるかを知っている。⁴

このように、マラグッチの発言はある意味政治的でラディカルである。彼は学校という空間を公共的で、子ども・教師・親がともに差異を認めながら市民として関わりをもって育つ空間として意味づけている。

1995年から毎年レッジョ・エミリアを訪れ、名誉市民にもなったブルーナーは、このようなマラグッチの精神を受けとめ、人間同士の尊敬の念と、学校に関わる全ての人間が可能性の探求に携わり、新しい経験を構築していることに驚きをもって述べている。⁵ また、同じアメリカの心理学者であるガードナーも、「子どもたちの協働の大切さはよく言われるが、教師や行政が親と共に協議し活動することは少ない」と指摘し、アメリカと比較して、レッジョの持続的な活動を高く評価している。

マラグッチと共にレッジョの幼児教育に携わり、レッジョ・チルドレンのコンサルタントとなったカルラ・リナルディは、ペダゴジーは選択を意味するとし、「選択とは疑わしきや不確かさを回避しない勇氣」だと述べている。⁶ 安全だけを追求すると思はれ失われていってしまう。

「不確かさ」はマイナスでなく、実践を省察し、新たな創造をうみだすのだという主張である。

では、実際の幼児学校や市民の姿はどうであろうか。今回の視察から幾つか例を挙げて考察する。

5. コリアンドリーネ (coriandoline)

—子どもの願いを活かした街づくり—

このプロジェクトは、不動産コンサルタントのパンタレオーネ氏を中心とする協同組合系の法人が、「子どもが住みたい家と街」をテーマとして立ち上げたもので、1995年に着工、完成が2008年という長期の取り組みである。

95年から2年間、彼らは子どもたち700名にどんな家が求められているのかを調査、さらに2年間、50名の教師や専門家や20名の都市プランナーと何度も協議を重ねる。その後イラストレーターやアニメーション作家とともにアイデアをまとめ実際に模型を作り、一万世帯に手紙を送り、このような家・街に住みたい人を募集して建築していったのである。

実際に、それぞれの家は玄関の入り口や間取り、大きさも様々だが、どの家にも自然とつながる大きな窓やアトリエがあり、楽しい壁画が描かれている。「王様が住んでいた」「山には笑うモンスターがいる」「塔にはお姫様もいるよ」などの子どもたちの思いが活かした設計で、中心にはみんなが集まることのできる場所もある。そこには、これまでの建設の記録や映像も展示されている。

パンタレオーネ氏はその後も、「移民の家」「老人の家」「若い家族の家」など、人々の願いに合った街づくりを続けている。彼の話には街づくりに対するしっかりとした哲学的なコンセプトがある。街はそこに住む人々と共に変化し長く続けていくのだという熱意を強く感じた。関係者も完成したら終わりではなく、ともに街を育てていく一員なのだという市民意識がそこにある。実際に建設までの記録などが置かれている集会所は街の「広場」でもあり、住民同士やここを訪れる人々が出会い、考え、交流する場になっている。

コリアンドリーネとは紙吹雪のことである。そこに住む子どもや家族と関係した多くの人々がこれからも集い、さらに紙吹雪のように華やか



写真1 段ボールで住みたい家をつくる



写真2 笑うモンスターの山 (ガレージ) の模型



写真3 笑うモンスターの山 (実際)

向かい合ったモンスターの山はガレージで、昼間はバスケットなどができるようになっている。また、上の山にはハーブなどが植えられていて、眺めの良い憩いの場になっている。



写真4 楽しい壁画のある家々

な色合いを重ねて街を築いていくのだという声が街のあちこちから聞こえてくるようであった。

6. 創造性を育む環境

—乳幼児施設、幼児学校参観から—

レジヨ・アプローチと呼ばれる幼児教育については、既に多くの書物で紹介されているので、乳児保育所と幼児学校での事例を紹介する。

① Giulia Maramotti (乳児保育所)

ここは、レジヨ・エミリアに本社のあるMaxMaraの創業者マラモッティの母の名をとって名付けられた保育所である。1999年に企業セミナーで学んだ若い女性8名が協同で、市の女性支援とレジヨ・チルドレンの援助を受けて起業。保育施設の拡大に迫られた市とジュリア・マラモッティ基金でこの保育施設が完成し、市から経営を委任された。

建物の設計は、2004年に財団が35歳以下のデザイナーを対象にコンテストを開き公募で決定。2008年に完成して運用を開始したという。ここに、若い人々を育てるという意識が、レジヨ・チルドレンの強力なスポンサーでもあるMaxMaraの姿勢が表れている。

園内では次のようにクラスが分かれていた。

乳児～11か月	3+5名	～18か月	18+3名
～24か月	21名	～32か月	24名

ペダゴジスタやアトリエリスタを含む8名のほかにキッチンを任されるコックと助手、それに2名のアシスタントが一体となって子どもたちを見守っている。

ペダゴジスタのエレナさんは、大切にしていることとして次の点を挙げた。

透明性：外と内をつなぐ。きれいな環境での生活が思考力育成に重要。子どもと教師、保護者との関係。
光：自然光の追求、影、反射→ライトテーブル、ウェブカメラからデジタル機器へ
専門性：それぞれの専門を生かして子どもの動きをていねいにみる。立体感も大切

この保育施設はとてもナチュラルな素材と色合いで柔らかい印象を持った。敷地には広い庭があり、遊具は一切ない。ハーブや無農薬の畑で五感を養い、自然の中で遊ぶことを大切にしているのだという。

室内の中心には広場があり、淡いパープルの机と椅子が置かれている。そこにはMaxMaraをはじめとした大人の服やネクタイ靴がきれいに飾られ、自由に遊べるようになっていた。広場に続くキッチンは透明なガラスで続いていて、いつでも中の様子が見えるようになっていた。乳幼児だからこそ、本物に出会わせるという姿勢を感じた。

また、乳児のアトリエは2階であったが、そこにあがる階段には、布や紙など素材が異なり



写真5 どの部屋からも続く広い庭



写真6 外から見た室内 左奥はキッチン



写真7 アトリエ

触ると多様な音が鳴るものがさりげなく置かれていた。月齢を意識した、細やかな環境設定がなされていることに感心した。

入所希望者が多く、困難な家庭から受け入れられているとのことだったが、若い保育者たちの熱意と工夫された環境の中で、子どもたちの成長を継続してみたいと感じた。

② Centro Rosa Galeotti (認可幼児学校)

この幼児学校は、もともと1954年に Ville Cesso の市内に設立されたが、子どもの減少や環境を考えて、自然に囲まれた郊外に移転したのだという。乳児保育所も兼ね備えており、乳児保育、ミックスクラス、幼児学校が2クラスで63名が在籍している。

門には、「Diritti」(権利)という看板がある。これはレッジョのすべての園や幼児学校や保育施設に掲げられている、バダゴジスタのマルゲリータさんに尋ねたところ、「自分たちの権利とは」という大きなプロジェクトを2015年12月から2年間行っているとのことであった。

エントランスは、見通しの良いダイニングを兼ねた広場。そこから各教室、アトリエに続く。

プロジェクトも盛んに行われ、乳児は「クモの巣とクモ」、3・4歳クラスでは、「進化」で花や野菜、植物がテーマ。4・5歳は「自分とは何か」。他に牛乳のプロジェクトや18世紀の古い建物のプロジェクトも行われていた。アトリエリスタは30代の男性で、教室には色のそろった形の異なる様々な素材が美しく並べてある。

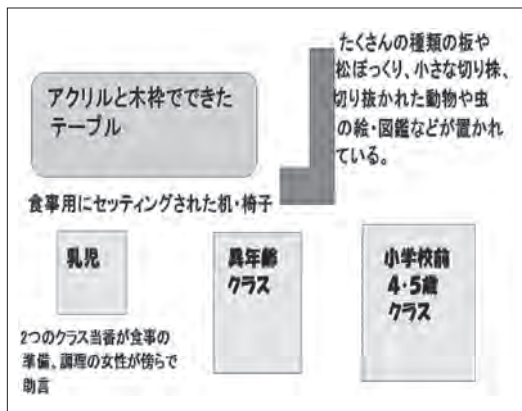


図1 食堂・広場



写真8 門に掲げられている「権利」



写真9 遊んだあとにできた子どもの作品

筆者が目にしたのは、広場の端に置かれた四角い箱に集まった3人の子どもたちであった。

【虫の公園】

3人(男子1名女子2名)が協働して公園を作り始めた。滑り台らしき板と小枝だけだった空間にA子が石を無造作にまいた途端公園の雰囲気。B子は高低のあるスゼリ代を作りたいがA子はバランスが崩れるとゆずらない。Cは切り株をあちこちに配置、てんとう虫の図鑑をみながら書き加える。板を組み合わせ立体的な空間に変化する。ふらふらとしていたB子も気を取り直し、松ぼっくりを高低差のなかにまとめて置く。公園が成長を続けている。

3人が自分の経験を活かしながら対話し、公園を作り出していくのも見事だが、様々な石や木材、すぐに切り抜ける動物などの絵や図鑑がさりげなくおかれていることに脱帽した。

それとともに、広場にあることで、年少の子が給食の準備をしながらのぞくし、コックさんや保育士も行き交いながらちらりと観察している。

3人が想像したものが広場を歩き交った人々にも何らかの影響を与える。園内広場は街の広場と同じで大人も含めた互恵的な学びを生み出すのだと気がついた。

7. 街を舞台に、身体が響きあう

—大人も子ども楽しむ Reggionarra—

今回の訪問で最も楽しみにしていたのが、ジャンニ・ロダーリが主催した、「シアター・ワークショップ」から発展した「レッジョ・ナラ」に参加することであった。10周年ということもあって、2日間で100を超える催しがカフェや図書館、大劇場や中庭、市内の広場などで開かれた。一人語りもあれば、ダンス、音楽、劇など表現方法は多彩で、出演者も子どもから保護者、専門家まで様々であった。

① ファンタジーを生み出す

—3人の王女とドラゴンの話—

緑豊かなチェルビ公園に隣接する小さなカフェでの演目である。

まず一つ目は、体の小さなカテリーナ王女が冒険の旅に出て、ドラゴンや魔女に難題を出されながらも知恵をだして解決し、心も体も成長していく話。二つ目は、婚約者のカルロ王子をドラゴンによって塔に閉じ込められたエリザベス王女が、王子を救うために立ち向かう話。三つ目は、大地震によって魚に足が生え、人間が歩けなくなってしまった世界で、唯一助かったマチルデ王女が、地底のドラゴンに会いに行き元の世界を取り戻す話。

特に二つ目の話は「腹いっぱいだから、お前を食べない」というドラゴンに対し、「あなたなら、大きな岩山を砂にできるでしょう?」「あなたなら、世界を10秒で回れるでしょう?」「あなたなら太陽まで飛んでいけるわよね」とおだて、くたくたになったドラゴンをやっつけて王子を救い出すのだが、その後が面白い。せっかく助けたカルロ王子は、臭くて不細工だった。すると王女は「私、いやだわ」と、歌いながら一人で帰ってしまうのである。さらに興味深かったのは、語りの途中で子どもの側から「黄色のド



写真10 「エリザベス王女とドラゴンの話」

ラゴンもいるよ」「赤も」という声が挙がると、それに対して「OK」と受け入れて、カラフルなドラゴンを登場させてお話を展開していったところである。

ここで語られた三つの話は、2006年から2016年までレッジョ・ナラで子どもや保護者達によって語り継がれてきたものだという。どの話の中でも、イメージが膨らむと子どもたちは思い思いにつぶやいていた。そのつぶやきをさえぎらず、受け入れて、ストーリーを柔軟に展開していく姿に感心した。3人の語り手は、語ると同時に子どもの声を聴き、判断し、新たな表現を生み出していたのである。

もう一つ感じたことは、「語りは身体で」だということである。3人とも、声だけでなく表情、そして両手の動きを含めた、身体丸ごとで語りかけていた。おおげさな身振りは、内容をかえって狭めてしまうと危惧していたのだが、ここでは実に自然に身体での表現がなされていた。ジャンニ・ロダーリが行っていた取り組みを彷彿させるような、ファンタジーの世界をその場にいる子どもたちと自由に展開していることに、心惹かれたひとときであった。

② 大人も全身で味わう

—手話通訳者との絶妙なコラボレーション—

レッジョ・ナラのプログラムは、下ののようなマークが加えられているものが多くあった。これは、女性アスリートを支援する団体と、「壁



写真11 後援のマーク

のない」(障害などの様々な違いを超えることを意味する)ことを支援する団体の後援が掲げられており、全盲のアスリートの語りもあったし、大きな会場では、手話通訳者が加わることも多かった。

レッジョ・ナラの最後の演目は、中心部のカゾッティ広場の特設舞台で行われた。前には大勢の子どもたちが座り、後ろの椅子席には入りきれないほどの大人たちが集まった。「燕尾服のないペンギンの話」は、もともとの話がある。

なぜか燕尾服をきていないペンギンが生まれ、彼はみんなと離れて冒険の旅に出る。多くの動物たちに出会い、苦しい目にあいながらも、戸惑い、悩み、考える。次第に成長して帰ったときには、他のものに負けないような立派な燕尾服を着たペンギンになっていたというストーリーである。

ここで感じたのはプロのパフォーマーの存在感である。幕開けの音楽(録音)とともに燕尾服を颯爽と着こなして、語り手が登場した。縦長の広い会場だったが、彼女の力強い第一声とともに、あっという間にみんなお話の世界に惹き込まれてしまった。そのタイミングの絶妙さ、声のダイナミクスや緩急のテンポ。表情も話術も実に見事で、大人の席からの笑い声も大きかった。今回、幾つか参加したナラの中で、大人が楽しんでいるのを最も感じたひとときであった。

次に惹きつけられたのは、手話通訳者のパフォーマンスである。この演目も「壁のない」という取り組みから、手話通訳者が付いていたが、その表情と動きが素晴らしく目が離せなくなった。イタリア語がよくわからなくても、素晴らしい語りを耳で聴きながら手話通訳の表情と動きをみていると、お話の場面でのペンギンの姿がいきいきと浮かんでくるようであった。日本の手話通訳者が「表現者」としてこのように聴衆に訴えることは、私の経験ではこれまでになく、今回、手話は決して「記号」ではないのだということを実感した。

幾つかのレッジョ・ナラに参加し、印象的だったのは、語り手が聴衆である子どもの声に応答して、ストーリーを展開する場面が多くみられ

たことである。「王女とドラゴン」の話では、子どもの想像したカラフルな色のドラゴンが登場し、「燕尾服のないペンギン」の話では、ペンギンの特徴を子どもたちが次々に話し、前に出て動きを見せる子もいた。「今ここで」作品が新たに創造されていることを実感した。

さらに、「黄色い傘」では、語り手であるパオラが、物語の最後を自分の解釈で変えていた。彼女がジャンニ・ロダーリのワークショップで学んでいたことを考えると、「ナラ」での表現では、たとえ元の物語があったとしても、それを「私」のものにし、「私としての物語」を語るということにも思える。

「ジャンニ・ロダーリ・シアター・ワークショップ」は、2006年に実験室が設置されたもので、一人ひとりの物語を語る生来の才能や、小さな日々の経験を壮大で創造的なものへ変換する能力を有しているという確信からうまれた文化的プロジェクトだという。

子どもが大切にされ、見守る大人もまた一緒に表現を楽しむ。自然体で市全体が文化を大切にしていることに心揺さぶられるとともに、ナラで発見した人々の関わり、街の存りかたと、5や6で述べてきた事例を重ねて、レッジョ・エミリアの市民性を育てているものは何かが次第に明らかになってきた。

8. 考察

① 大人の楽しむ姿は感染する

表現は「他者」あってこそ育つ。今回一番驚いたのは、大人が心からナラへの参加を楽しんでいるように思えたことである。



写真12 語り手と手話通訳者の表現

例えば、広場で音楽トリオの演奏に大人たちが真剣に耳を傾け、豪快に笑っている。また、ある人たちは会の運営や運営を助け、舞台裏を支える。またある人は、語り手となって聴衆の前に立つ。参加の仕方は様々だが、どの人も他者を信頼し、協同して支えている。「ピノキオ」の上演では、溢れるほどの聴衆の中、「子どもを先に通そう」という声が続き、知らない大人に支えられながらもおびえることなく会場に入り、子どもたちが楽しそうに鑑賞していた。

ここにあるのは、ロダリーやマラグッチに流れていた楽天主義でもある。

こうした大人の相互依存、相互承認が、街全体を「表現が行き交う大きな舞台」へと変容させる主体となっており、そのような姿勢が子どもたちに「感染」して、「なんだかおもしろそう」「やってみたいな」という参加意欲をさらに高めているのである。

② 想像から創造へ

コリアンドリーネは、異なる立場の人々が興味を持って求める世界を追求していったからこそ、ファンタジーに溢れた街が生まれていた。レッジョ・ナラも、子どものファンタジーと創造性を引き出し、協同し探究して、新たな創造的な表現をうみだしていた。

こうした想像力を高めるためには、「聴く身体をつくる」ことが重要である。子どもたちは静かに前に座ると、語り手のことばだけでなく、表情やしぐさ、その場に集った人々が創り出す独自の雰囲気や身体まるごとで受けとめ、つぶやいたり、一緒に動いたりして応答していた。「聴く」行為は能動的で感受する力を育てるものであり、安心してモノや他者と関わることのできる環境を整えることの必要性を実感した。

そして、聴く力を育てるのに重要なのが、「広場」の存在なのである。広場は、人々が出会い、仕事をし、交流し、絶えず行き交う場である。幼児学校の広場でも、通りがかりに目にしたさりげない光景から大切なものを幾つも発見しているのを感じた。そこで生まれる感情や新たな認知は、大人にとっても子どもにとっても貴重であり、このような場を大切にしていることが

市民性を育てているのだと考える。

③ 異なる表現が行き交う中で育つ

ナラの中で再創造される作品には、聴衆と語り手、聴衆同士やもとの作品との応答が色濃く反映される。それは、世界各地にいた吟遊詩人たち、トラベラーや琵琶法師を彷彿させる。声や楽器、身体表現、舞踊などの様々な要素が、それぞれの作品の中で独自に合わさり、その場に集った聴衆の中で変化する。広場は混沌とした新しい文化が生まれる場所でもある。

聴衆の生活経験や社会的背景は一人ひとり異なり、当然興味も異なる。その異なりを一人ひとりが自分の内部に取り入れてすり合わせ、味わい、複合し触発しあう。他者と多様に響きあう空間が内と外をつなく「広場」によって生まれるのだと感じた。

④ ケアリングの関係

子どもの住みたくなる家を調査する大人と子どもの関係、保育者と子どもの関係、あるいは語り手と聴衆、聴衆同士の関係は、ケアリングの視点からも興味深い。

レッジョ・エミリア市では子どもや女性、障害や移民としてマイノリティの立場の人権を支援しており、ナラでもその姿勢は貫かれていた。全盲の水泳選手の語りに対し、子どもも大人も選手も対等に向き合い、障害についても、自然体で答えていたのが印象的であった。

ここで筆者が目にしたのは、語り手が表現することで聴衆をケアするだけでなく、表現を心から楽しみ、応答する聴衆によって、自らも充足感を得られる、対等なケアリングの関係であった。

保育の場面でも、子どもたちが発見し創造することは大きな喜びであるが、それを発見した保育者もまた、自らの中に「新たな学び」を見出すという対等な関係なのだということが実際の場面から伝わってきた。コリアンドリーネの住民と関わった人々との関係も同様である。

上下関係のない水平な空間で、他者と身体を委ね合って心地よい時間を共有する。レッジョ・エミリアの職場が、協同組合系の法人が多いことも、このような風土を耕していると思われる。

⑤ 市民として育つ

筆者が参加したナラは、いずれのお話も主人公が弱い立場にあり、様々な困難に出会い、その都度悩み考え、新たな行動に出るというストーリーであった。子どもを始め、聴衆は主人公の立場になって一緒に立ち止まり、悩み迷い、どうすべきかを考える。あるときには、同じまなざしでその世界を「共感」し、「ときめき」をもって旅する。あるときには、「批判」と「問い」を持って、周道的にその世界をのぞく。このような経験を重ねることから、創造的な表現や思考が生まれるのだと考える。

これは、保育の場面でもみられた「異なる表現を味わい、批評し、自らを問い直す営み」へと続き、新たな「私」としての「ことば」を持つことにつながる。それこそが、レッジョ・エミリアという町が大切にしてきた、「民主主義社会の担い手となる市民を育てる」ことなのだろう。

そして、このような経験を重ねているからこそ、異なる宗教を持った人々に対しても楽天的に受け入れ、行き交い、交流することができるのであり、彼らもレッジョ・エミリアでの新しい市民としての生活を求めて来るのではないだろうか。

9. おわりに

レッジョ・エミリアの教育と、フレネ教育は、ともに「市民を育てる・表現者を育てる・哲学がある」を大切にしている。フレネは個の興味関心をベースに他者と協働した仕事や批評を行う中で社会化を図った。レッジョの幼児教育は協同をベースに他者との関係性の中で個が育つという姿勢を強くだしている。子どもは市民としてそこにいる。「街とともに育つ」「大人の成熟が子どもを市民として育て、さらにそこからまた大人も学ぶ」というサイクルが息づいているところがレッジョ・エミリアの大きな特徴であろう。

筆者も帰国後、地域の人々とともに育つ広場を求め、地域のショッピングセンターなどで異なる立場の聴衆を前に「一緒に音楽を楽しむコンサート」を試行錯誤しながら始めた。

大人が「楽しむ」、大人が「聴きあう」、大人が「自らの声を持つ」。それなくして教育は変わらない。そこから子どもと共に楽しむ保育者が育つのだと心において、今後も取り組んでいきたい。

参考文献

- C. エドワーズ, L. ガンディーニ, G. フォアマン編/佐藤学, 森真理, 塚田美紀訳 (2001) 『子どもたちの100の言葉——レッジョ・エミリアの幼児教育』 世織書房
- レッジョ・チルドレン著, ワタリウム美術館編 (2012) 『こどもたちの100の言葉』, 日東書院
- 佐藤学 監修, ワタリウム美術館 編集 (2013) 『驚くべき学びの世界——レッジョ・エミリアの幼児教育』, 東京カレンダー
- 田辺篤子・青柳啓子編 (2014) 『田辺敬子の仕事 教育の主役は子どもたち』, 社会評論社
- 西脇明美 (2015) 『「レッジョ・エミリアの教育」についての一考察～教育共同体の樹立～』 『愛知淑徳大学教志会研究年報第二号』 pp. 121-137
- 里見実 (2016) 『ローリス・マラグッチとレッジョ・エミリアの幼児教育』, 『國學院大學教育学部研究室紀要第50号』 pp. 163-184
- 濱口由美, 高野牧子, 猶原和子 (2017) 『レッジョ・ナラのキセキ』 レッジョ・ナラ研究会

注

- 1) 里見実 (2014) 「イタリアのフレネ教育運動」②, フレネ教育研究会会報No. 108, pp. 2-13
- 2) 田辺敬子 (1985) 「子どもの楽園を見つけた」 『世界の自由学校』 麦秋社より引用
- 3) マリオ・ローディ, 田辺敬子訳 (1988) 『わたしたちの小さな世界の問題』, 晶文社
- 4) Roris Maraguzzi (1993) 『A Charter of Rights』, 訳がレッジョ・チルドレン著 (2012) 『子どもたちの100の言葉』 pp. 343-344 に掲載されている。
- 5) ジェローム・ブルーナーのこの言葉は、「小都市の奇跡」として, レッジョ・チルドレン (2012) 『こどもたちの100の言葉』 pp. 167-169 に掲載されている。
- 6) カルラ・リナルディ, 里見実訳 (近刊予定) 『レッジョ・エミリアと対話しながら』 の中に収められている。
- 4) Roris Maraguzzi (1993) 『A Charter of Rights』, 訳がレッジョ・チルドレン著 (2012) 『子どもたちの100の言葉』 pp. 343-344 に掲載されている。
- 5) ジェローム・ブルーナーのこの言葉は、「小都市の奇跡」として, レッジョ・チルドレン (2012) 『こどもたちの100の言葉』 pp. 167-169 に掲載されている。
- 6) カルラ・リナルディ, 里見実訳 (近刊予定) 『レッジョ・エミリアと対話しながら』 の中に収められている。